

農山漁村学童の偏食調査について

富山県農村医学研究会、金沢大学	豊 田 文 一
金沢大学医学部耳鼻咽喉科学教室	杉 盛 恵
農協高岡病院耳鼻咽喉科	豊 田 務
”	木 下 弘 治
金沢大学医療技術短期大学部	津 田 光 世
”	河 野 保 子

はじめに

経済の成長とともに国民の生活水準も漸次向上し、食生活も著しく改善されている。しかし地域環境による格差はいまだ十分に解消されず、その実態は厚生白書にも明かにされている。しかしこの国民栄養調査は国民全般に行った抽出統計であり、小児については触れられていない。また同白書のなかに「こどもと社会」という問題が取りあげられているが、小児の栄養について論ぜられていない。また成人における栄養問題は、小児期にさかのぼって考えなければならないし、また小児期の健康にも関連があり、学校保健の上でも重視されねばならない。このことについて従来等閑視されている憾があり、これについての調査報告はないようである。

私どもは、たまたま農山漁村の学童の検診を行う機会をえ、各種疾患と栄養との関係を検討せんとしたが、この点に関し何れ発表する予定である。本篇において取りあえず学童の偏食調査成績についてのみ叙述し、いささか考察を加えてみたいと思う。

調査成績

本調査は昭和46年、石川、福井、富山の3県にわたり、農山村学童 2,816名、対照として都市学童 1,328名、計 4,144名である。対

象小学校は、石川県輪島市西保(a)、同西二又(b)、同舳倉(c)、鳳至郡宮地(d)、鹿島郡鉦打(e)、石川郡白峰(f)、福井県勝山市北谷(g)、南条郡堺東(h)、富山県中新川郡上市町白萩東(i)、同大岩(j)、同白萩南(k)、同中央(l)、氷見市中波(m)、同中田(n)、対照は金沢市小立野小学校を選んだ。(第1図)地帯別ではb、d、e、f、g、h、i、j、kは山村、a、c、m、nは漁村、lは

第1図 調査地図



平坦地農村として大別した。調査方法は家庭保護者へ調査用紙を配布し、偏食の有無、好きな食品、すきな食品の品別の記入を求め集計を行った。なお、調査成績の対比は都市学童を基準として行った。

まず学童中の偏食児童の比率をみると、第1表に示すように、漁村63.3%、山村61.8%、平坦地農村66.1%、都市69.7%で概ね60-70

第1表 偏食児童の比率

地域別 調査人員	漁 村		山 村		平坦地農村		都 市	
	343		742		1,731		1,328	
偏食の有無								
偏食のあるもの	218	63.3%	485	61.8%	1,147	66.1%	926	69.7%
偏食のないもの	125	36.4%	284	38.2%	587	33.9%	402	30.3%

※…ts>t(5%)
 ※※…ts>t(1%)

%の間にあり、統計学的にみて山村では低かった。

第2表 偏食児童のきらいな食品

地域別 偏食児童	漁 村		山 村		平坦地農村		都 市	
	218		485		1,147		926	
肉 類	29	13.3%	75	15.5%	242	21.1%	179	19.3%
魚 類	71	32.6%	72	14.8%	274	15.8%	222	24.0%
魚肉類	10	4.6%	9	1.8%	13	0.1%	12	1.2%
野 菜	185	84.7%	269	55.1%	593	51.7%	509	55.0%
卵	0	0%	5	1.0%	13	0.1%	12	1.3%

※…ts>t(5%)
 ※※…ts>t(1%)

第3表 全学童よりみたきらいな食品

地域別 調査人員	漁 村		山 村		平坦地農村		都 市	
	343		742		1,731		1,328	
肉 類	29	8.4%	75	10.1%	242	13.9%	179	13.5%
魚 類	71	20.7%	72	9.7%	274	15.8%	222	16.7%
魚肉類	10	2.9%	9	1.3%	61	3.5%	54	4.0%
野 菜	185	54.0%	269	36.2%	593	34.2%	509	38.3%
卵	0	0%	5	0.8%	13	0.8%	12	0.8%

※…ts>t(5%)
 ※※…ts>t(1%)

次に偏食児童のきらいな食品についてみると、第2表に示すように、肉類では漁村13.3%、山村15.5%、平坦地農村21.1%、都市19.3%で、統計学的には農村は高率で、山村は低かった。魚類では漁村32.6%、山村14.3%、農村15.8%、都市24.0%で、漁村は有意の差で高く、山村、農村は低かった。野菜では漁村84.7%、山村55.1%、農村51.7%、都市55.0%で、漁村では極めて高い比率を、農村では低い比率を示している。

さらに全学童からみると、第3表の如く肉類では漁村8.4%、山村10.1%、農村13.9%、都市13.5%で、漁村では低率であった。魚類は漁村では20.7%、山村では9.7%、農村では15.8%、都市では16.7%で有意差はなかった。野菜では漁村54.0%、山村36.2%、農村34.2%、都市38.3%で、漁村では高率であった。

全学童のその他のすき、きらいの食品を品別についてみると、第4表に示すように、めん類、ライスカレーを好むものが多い傾向にあった。

とくに学童として、高率に好まない食品である野菜の品別について調査してみると、第5表に示すように、にんじん、ねぎ、たまねぎ、ピーマン、トマトなどがあげられる。にんじんについては、農山漁村ともに都会に比して高率であり、ねぎ、たまねぎも同様の傾向にある。ただしピーマンについてはその逆である。

第4表 全学童のその他のすき、きらい食品 + すき - きらい

食品別	地域別 学童数	漁 村		山 村		平坦地農村		都 市	
		343		742		1,731		1,328	
めん類	+	14	4.1%	29	3.9%	56	3.2%	56	4.2%
	-	5	0.1	2	0	6	0.3	2	0
ライスカレー	+	39	11.4	47	6.3	111	9.7	66	5.0
	-	1	0	1	0	2	0	2	0
ハム・ソーセージ	+	10	2.9	19	2.6	59	3.4	40	3.0
	-	1	0	4	0.5	4	0.2	4	0.3
サ ラ ダ	+	3	1.0	27	3.6	29	1.6	8	0.5
	-	3	1.0	3	0.4	5	0.3	3	0.3
牛乳・乳製品	+	1	0	3	0.4	12	0.6	11	0.8
	-	6	2.0	8	1.1	33	1.9	24	1.8
油あげもの	+	8	2.2	18	2.4	21	1.2	14	1.1
	-	0	0	9	1.2	13	0.8	6	0.4

第5表 偏食学童の特にきらいな野菜食品別

食品別	地域別 漁村		山 村		平坦地農村		都 市	
	216	%	428	%	342	%	408	%
にんじん	92	42.6	200	46.7	116	33.9	92	22.5
ね ぎ	40	18.2	93	21.7	67	19.6	50	12.3
たまねぎ	24	11.1	46	10.8	63	18.4	31	7.6
ピーマン	3	1.4	45	10.5	44	12.9	156	40.8
ト マ ト	4	1.9	18	4.2	17	5.0	18	4.4
い も	1	0.5	4	0.9	10	3.0	14	3.4
な す	5	2.3	12	2.8	10	3.0	10	2.5
こほう	13	6.0	15	3.5	0	0	3	0.7
だいこん	17	7.9	7	1.6	0	0	4	1.0
グリーンピース	0	0	0	0	15	4.4	1	0.2

総 括

以上私どもは学童を中心として、地域別に偏食の調査を行なった。その成績からみて、偏食の比率がかなり高度であることを知りえた。ここで国民全般の栄養摂取について考えてみることにする。国民1人当りの必要熱量は2,000~2,200カロリーであるが、その大半は米を主体とする穀類でまかなわれている。国民栄養調査でも示されている通り（昭和44

年度）7大都市では42.2%、町村では50.6%と必要量カロリーの半ばはこれによっている。このことは地域環境により大きな差異を示すもので、10年前の資料では、必要熱量について農家では約70%、農耕を行わない消費世帯では65%という統計もでている。これを諸外国と比較してみると、澱粉性食品カロリーは、アメリカ、カナダ、ニュージーランド、スウェーデン、イギリスなどでは30%前後であるのに、日本を最高としてパキスタン、インド、トルコ、エジプトなどでは70%近い比率を示している。しかも動物性蛋白質の摂取量は前者の群では60~70g、後者の群では10~15gで検段の差がある。由来人の健康を左右するものは栄養問題であるともいわれる。しかしわが国はその点において開発途上国並である。最近の所得水準、生活水準の上昇により、家計費中の食糧費が増加しているものの、その内容を検討してみると、とくに都市では栄養価の高い食品よりも、嗜好性食品に多く費される傾向にあり、食糧費の増加が、そのまま栄養水準につながっていないともいわれている。

さてこの農山漁村学童の偏食調査は、家庭

における状況をアンケートによって求めたもので、その成績についての批判は免がれないとしても、そのすう勢が把握できたものと思う。私どもの一人豊田(文)はかつて農夫症に関する一連の研究を行ない、その発生について農村地帯の環境の劣悪、過重労働、さらに摂取栄養のアンバランスが主な原因であることを指摘した。これらの問題はわが国農村の宿命ともいえるものであるが、早急に改善すべきものである。しかし国民栄養調査にみられるように改善の途が遅々として進んでいない。

この調査では量的検討はできなかったが、食品別により差があった。すなわち都市、平坦地農村では肉類の嗜好が、山漁村に比して多かった。また海岸にあり、常に魚類に恵まれると思われる漁村の学童は都市に比して、これを好まなかったことは奇異に感じる。また漁村では野菜を好まない。10数年前私どもは農村の栄養について、農民と語り合ったとき、たまたま1日1個の卵を食すべきことを提案したところ、卵は商品で、それぞれの家庭の消費物でないという言葉を引き啞然とした記憶がある。漁村における魚類もまたこれに通ずるような気がする。野菜は偏食学童では好まれていない。しかもCa、P、V.A、V.Cの多量に含まれるにんじん、ねぎ、トマト、たまねぎをきらう。野菜そのものは栄養価が高くないが、自然食品よりえられる栄養素は、これらのものにあつては他の野菜に比して多量に含まれている。留意すべき事柄である。

さて現状における栄養改善は保健所の栄養指導員が中心となって母子衛生、成人病対策等保健衛生の諸施策と密接な連携のもとに行なわれている。しかしこの行政指導が効果の高い実績をあげているかどうか。国民栄養調査における栄養摂取量の推移をみても、まことに微々たるものである。ここにみられる学童期の偏食は果して成人になるまで是正され

るか。これも環境からみた栄養摂取量の差異からみれば、なかなか困難のように思われる。最も重大な成長期の栄養摂取のアンバランスは直接児童の体質に影響を及ぼす。学校給食が普遍化している今日、学童に対して家庭教育はもちろんであるが、学校給食の面でも大いに考慮を払ってもらいたい。

本報告がその意味において一つの資料として参考になれば幸いである。

結 論

私どもは石川、福井、富山の北陸3県にわたり、農山漁村学童2,816名、対照として都市学童1,328名について、その偏食の調査を行った。

その成績は次の通りである。

(1) 偏食学童の比率は漁村63.3%、山村61.8%、平坦地農村66.1%、都市69.7%で、山村は対照である都市に比較して有意の差をもって低率であった。

(2) 偏食児童のきらいな食品として肉類は漁村13.3%、山村15.5%、農村21.1%、都市19.3%で、都市に比較して有意の差をもって、山村では低く、農村では高かった。魚類のきらいなものの比率は、漁村では36.6%、山村では14.8%、農村では15.8%、都市では24.0%で都市に比して有意の差をもって漁村では高く、山村、農村では低かった。野菜をきらうものは漁村84.7%、山村51.1%、農村51.7%、都市55.0%で、都市に比較すると有意の差をもって漁村では高く、農村では低かった。

(3) 全学童よりみてきらいな食品は、都市を対照としてみると、肉類は漁村では低率、魚類は有意差なく、野菜は漁村において高率を示した。

(4) とくに偏食学童のきらいな野菜は、にんじん、ねぎ、トマト、たまねぎにおいて高率を示した。

(5) 以上の調査成績より、学童において多数の偏食のあることが判明し、学校教育のみ

ならず、家庭教育においても栄養摂取に関心をもち、その改善のため推進してもらいたいと思う。

この調査は金沢大学医学部耳鼻咽喉科学教室の諸君の協力にまつところが多い。ここに附記してその労苦に謝意を表す。

文 献

- 1) 日本医師会編：あなたの健康 春秋社1965
- 2) 厚生省編：厚生白書 1971
- 3) 科学技術庁資源調査会編：最新日本食品成分表 1971

(本文の要旨は昭和48年10月熊本市における
第22回日本農村医学会総会で講演した。)